行動障害を示す自閉症の人たちへの支援
―構造化のアイデアを応用して―

川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科　寺尾　孝士　先生

講演要旨

Ⅰ　行動障害を示す人たちへの支援について

筆者が勤務していた居住型施設（星が丘寮）は，北海道の函館圏に位置しており，幼児から高齢者までの知的障害のある人たちを対象とした施設群（通所，居住，福祉工場，グループホーム等）で構成されているおしまコロニーにおいて，行動障害等の困難性を示している知的障害のある自閉症の人たちを対象としている．

入所時点において多くの利用者は，身辺処理の技能が身についていなかったり，言葉の理解が正確でないうえに，表現方法も適切ではなく例えばかんしゃくでしか要求表現ができない等の状態であった．また，人とのつきあい方も未熟で，全体的に身勝手とも思える行動が中心で，二次的，三次的な不適応行動を示していた．特に大きな問題となっていたのは，パニック，自傷・他害等の粗暴な行動であった．

これらの問題は，障害特性や機能レベルに応じた養育，療育や教育等を受けることができずに，誤った学習が積み重なっていたり，成人期になるまでに身につけておかなければならない基本的なことが身についていないことが原因として考えられた．

このことに関連して，行動障害等の問題を自閉症の人たちが示す原因として，厚生労働科学研究飯田班（強度行動障害を中核とする支援困難な人たちへの支援に関する研究）の主任研究者であった飯田は次のようにまとめている．

・自閉症について正しく理解されていない．
・知的障害の療育方法と自閉症の療育方法は異なるものだが，知的障害の方法ですすめられている．
・自閉症の診断は早期になされるようになっているが，育て方がガイダンスされていない．
・特に，知覚過敏・コミュニケーションへの配慮がなされていない．
・本人の不安・了解のできなさ・特有の偏りなどから，事態に適応できず，その表現方法がストレートになるので扱いがずれてしまう．
・年少児３歳頃すでに行動障害の兆候を見せていることもあるが気がつかない．
・学校教育の固に対する配慮のできにくさ，教育方法の未確立

以上のようにできなさと困難さを示している成人期の自閉症の人たちが，安定して暮らしていくためには，周囲の人や環境にたいして基本的な信頼感や安心感が育っていることを土台として，コミュニケーションをしようとするマインドと機能レベルに応じたスキルが育っていること，本人の得意なことを生かす場面を持っていることが重要である．そして，機能レベルに応じた自立のスキル，働く意欲，興味や関心を生かした余暇のレパートリーを持っていることが長い成人期を豊かに暮らしていく上で必要である．

これらの基本的なことを支援に生かしていくには，理解しやすい予測しやすい環境を保障し，できなさや困難性が高いため失敗経験を積みやすく意欲が育ちにくい重度の自閉症の人たちに対しては，成功経験を積み上げていくことが必要であると考えた．

Ⅱ　取り組みの実際

①評価・観察

一人一人の機能レベルや得意・不得意等のことを把握するために，評価・観察を行った．

評価の範囲は，日常生活，社会生活，作業，余暇等である．評価の段階は，「合格」「芽生え」「不合格」で行った．支援していく上で，芽生えの段階の行動に働きかけ，成功経験を積み上げていくようにした．

評価できない項目については，観察を行い把握していくようにした．観察の結果，把握できたことについては，実際に支援していくときに配慮するようにした．

②スケジュールの提示

理解しやすく，見通しのつく環境は，安心感とその環境に対する信頼感につながる．そのため，一人一人の機能レベルに応じて，スケジュールを提示し，いつ何があるのか，何をすればよいのか等を具体的に伝えていくようにした．

③物理的構造化

星が丘寮を利用している人たちは，知的に重度の自閉症の人たちであったため，その場所の意味を明確に伝えるために，一つの場所を多目的に使わないようにしたり，カーペットの色や家具の配置で場所を区切りその場所の意味を具体的に伝えるようにした．また，注意といったことに問題がある人たちに対しては，衝立を利用するようにした．

④ワークシステム

作業や余暇活動をやったという実感を持ちながら見通しを持って自立的に行っていくことができるように，「何をするのか」「どのくらいの時間／量を行うのか」「終わりは」「終わったら次は」の情報を，具体的に明確に示すようにした．

⑤視覚的に明確に伝える配慮

話し言葉や物事の意味理解に困難性の高い自閉症の人たちにたいして，彼らの得意な「視覚的な強さ」を利用し，色々なことを視覚的に配置したり明確に示したり，視覚的な指示書等も利用しながら，「分かりやすく」伝えていくようにした．

⑥ルーティン

自閉症の人たちは，パターン化しやすい傾向にある．このことを生かし，将来暮らしていくために必要な行動パターンをルーティン化していくようにした．ルーティン化した行動はいつも決まった手順なので，次に何をしなければならないのかについても予測しやすくなったようである．

Ⅲ　終わりに

TEACCHプログラムの構造化のアイデアを応用して支援に取り組んだ結果，星が丘寮を利用している人たちは，行動上の問題は減少し，自分でできることは自立して様々な活動に取り組んでいいくことができるようになった．作業においては，職員の援助のもとに施設外の地域の事業所での仕事にも取り組めるようになった人たちもいた．余暇活動も，地域にあるボーリング場やプール等の資源を利用したり，旅行やキャンプ等も楽しめるようになった．

もし，星が丘寮が構造化のアイデアを知らなかったら，利用している人たちを鍵のある部屋に閉じ込めたり，行動上の問題にたいして職員が力で押さえ込んだり，怒鳴りつけていたかもしれない．そして，支援と称して，思いつきや場当たり的な対応を繰り返していたのではないかと思う．その上，職員の価値観や美意識，安易なヒューマニズムを押しつけていたかもしれない．

そう考えると無知は罪であると思う．TEACCHプログラムは，このことを我々に気づかせてくれた．